

一 歌人の生涯

——わが師五味保義先生——

実は、前に松隈先生からお話ございまして、私がここに掲げたような題目を申しましたら、それよりも自分のことを語れというようなご要望があつたんです、自叙伝を語れというような。いかに私のつらの皮があつても、ちょっと気恥ずかしいもので、そこを調整しまして、まず自叙伝の一部分からはじめて、そのうちに本題に入るといふ方法を考えてみたわけでございます。

一九一五年すなわち大正四年に、千葉県の野田というお醤油の産地で私は生まれたわけです。そして近くの柏町にある旧制中学を出ましたが、中学で剣道ばかりやっていたために、卒業して一年浪人しました。浪人中に伝染病にかかって死にかけたりもするんですけども、とにかく昭和九年の春に東京高等師範学校という学校に入りました。そして間もなく、クラスの者のすすめで短歌会に入りました。学校が小石川の、今の文京区ですが、大塚にございますので、大塚短歌会という名前であつたんですね。月に一回、土曜日の午後かなりおそくなつてから先輩が指導に来て、寮の一室の狭い面会室がございましたが、そこに集まって、三十人くらいだったでしょうが、その先輩の指導、つまり作つた歌を批評してもらつたり、

清水房雄

講話を聞いたり、そういうことがあつたわけです。その時指導に来て下さつたのが五味保義先生ですけども、今から考えてみると先生三十出たばかりなんです。今の私の年からいいますと小僧ですわね。それが非常に年配で偉く見えて、むしろ恐かつたですね。額の広い丸顔の、目は大きくないけどクリッとして。その目で見つめられると光で刺されるような、そういう目を持った色白の青年でした。非常に熱心に歌の指導をして下さるほかに、正岡子規とかあるいは万葉集の話をして下さつたけど、こっちは残念なことに昼間の剣道の稽古ですっかり参っていますから、大体居眠りで過ごしちゃう。今考えるところと申すから、これはもうやむを得ませぬ。それが昭和九年です。で、あとずつとお世話になつたわけなんですけれども、この辺で視線をずらしまして、指導に来て下さつたその五味先生の方に話題を集中させましょう。

昭和九年という年は、一体五味先生における文学者としてのどのような時期に当たつていたのかということ、ちょっと考えてみたい、お話ししてみたい、とこう思います。先生は長野県の諏訪のお生まれです。下諏訪ですね。諏訪神社から歩いて十分くらいでしよ

うか、こ湯の上という字のところに家がありまして、お父さんは五味時三郎といまして、小学校の先生。後に校長さんになりましたが。先生にはご兄弟がたくさんおられまして、お姉さんが二人。その次が保義先生です。それから妹さんですが、三枝さん。禮夫さん、智英さんと兄弟がたくさんあったわけです。

保義先生のこととはあとで申しますけれども、禮夫さんという弟さんは群馬大学の教授、もう退官されたと思います。末っ子の智英さんは東大の名誉教授で、東大をおやめになると学習院の教授をやつて、実はこの三月に亡くなられたんですけれども、万葉学者として日本で最高だったんです。万葉集の論文書いて博士になる人は皆、智英先生が目を通さない博士にならない。そういう具合だったんです。最高だったんです。そのくせ先生自身は博士号を取っておりません。昔私が、先生、博士にならないんですかと言つたら、ふんといつておしまいになつちやつたんですけれどもね。そういう偉い兄弟をたくさん生んだ、ちっぼけな、古い家なんですけれどもね。ですから余り豊かではなかったと思います。

先生の叔母さんのうちのお一人、五味えいという方が小学校の先生をやつていまして、島木赤彦の歌のお弟子だったんです。赤彦は諏訪の出身で、高木というところの出身ですけれども、そのお弟子です。お父さんの時三郎先生は高島小学校で赤彦の同僚であったという関係もありますし、赤彦の長男で政彦さんという方が小学校で保護少年の一年上で。お父さん同士が同僚で親しくて、それで学校も一年違いで、ということ非常に仲良くしていたんですね。ついでですけれども、赤彦に「逝く子」という連作がございまして、それは政彦さんが後に青年期に入った頃に亡くなった時の歌なので

す。中国ではこれを読んで泣かないやつは人間じゃないという名作が三篇あるそうです。李密の「陳情の表」、諸葛亮の「出師の表」、それから韓愈の「十二郎を祭るの文」。これらは皆時々高校の教科書に出ますけれども、これを読んで泣かないやつは人間じゃないと言いますが、私は赤彦の「逝く子」を読んで泣かないやつは人間じゃないと思う。そういうような、すばらしい挽歌なんです。政彦さんは若くて死んじやつたんですけれども、それが幼い頃の保義先生の親友だったわけです。

そういう関係で保護少年は早いうちから歌に触れることになる。つまり赤彦が編集長であったアララギの歌に触れる。叔母さんのところに雑誌が送られて来るんですからね。そういう非常に自然な形で歌に近づくということになっていたと思いますね。ご自分もその事はお書きになっております。十三歳の時にはもう歌を作り始めているんです。小学校を終わりますして、諏訪中学校に入學します。いまの諏訪清陵高校ですね。弟さんの禮夫さんも諏訪中学を出ます。一番末っ子の智英さんも諏訪中学を出ました。この智英さんというのは幼い頃から非常に秀才だったそうです。

私は昭和十三年に半年ばかり智英先生と一緒に世田谷に下宿したことがあるんですけれども、その時智英先生は三十一歳なんです。が、三十一歳で第一高等学校、つまり今の東大の教授なんです。助教授じゃありませんよ。三十一歳で教授だったんです。ですから東大出の中でもずば抜けた秀才だったらしい。ここでやや声を小さくして言いますと、中学でその智英さんは一番になったり二番になったりしたそうです。智英さんが二番になった時は小尾廂雄という少年が一番だったそうで、これは本人から聞いたんだから間違いな

い。一番、二番を競った仲なんだそうです、小尾先生は。

さて、保義先生は先ほど言いましたように、諏訪中学を卒業し、一年ほど高島小学校の代用教員をやりまして、大正九年に東京高等師範学校に入ります。文科第二部という国語・漢文両方を修める科に入ったのです。

この高等師範学校へ先生がお入りになったことで、ちょっと注目すべき問題が一つあるんです。それは同じ文科第二部の一期上に石森延男という北海道出身の学生がいたそうです。この人は後に児童文学では日本のトップスターになります。さらにその一年上には池田龜鑑という学生がいました。池田さんはいもう亡くなりましたけれども、在世中は源氏物語では日本最高の学者だったですね。と同時に学生時代からペンネームを二十も三十も使って書きまくって稼いで、自分の学費や弟さんの学費を稼いだという。「馬賊の歌」という名作などは、私は少年時代に読んだことがあります。つまり石森さんにしても池田さんにしてもストーリーテラーというんですか、そうなんです。その仲間だったことはですね、五味先生の話術の巧みさに関係があると思うんです。実に話がうまかったですね。それから文章のうまさ。これはやっぱり何か関係があるんじゃないかと思えます。

大正十年に保義青年は赤彦を訪問します。つまり、それまでは赤彦のお弟子の叔母さんを通して、赤彦を知っていただけの関係だったけれども、正式に弟子入りなんてものはしなかつたんですね。高等師範に入ってから、二十歳になってから、赤彦のところへ行って指導を受けるようになる、いわゆる門人になる、ということなんですけれども、その頃作った歌を赤彦が非常にほめているんですよ。

ね。たとえは

ひた悩む弟の背をさすりつつ着物の紺の手に染みにけり

という歌です。着物の紺というのは、これは昔のことで、本式に染めたやつですから、紺が手に染まりますよね。そういう歌なんです。これは弟さんの禮夫さんも智英さんも余り丈夫じゃなかったらしいですね、しょっちゅう病気をしたらしいですよ。そういう歌なんです。これを赤彦が非常にほめまして、「アララギ」の歌会で集まった時に、人々に、これはまだ會員じゃないけれども、こういう歌をつくる者がいるといつて見せたことがあるそうです。保義青年は、私も「アララギ」に入りたと言ったら、赤彦は、まだいいよ君、と言って入会を認められなかった。そこで先生は内緒で入会しちゃったのだそうです。

先生が「アララギ」に入会したという、これは一種の運命的な結果を招くことになるだろうと思うんです、いろんな意味です。

大正十三年に高等師範学校を卒業しまして、東京の、当時は東京府でございますから、東京府立の第七中学、府立七中へ就職いたします。今の都立墨田川高校でございます。そこに在職一年間なんですけれども、その時に教えた生徒の中に女優の沢村貞子の弟で、もう亡くなりましたけれども非常にいい俳優だった加東大介なんかもいたそうです。この墨田川の七中時代のことについて、私は非常に注目すべきことが一つあると思うんです。それは七中の国語の先生に安塚千春という人がいた。それから今井栄しほという先生がいた。安塚という人は茨城県の出身でございます。成績優秀で、橋詰先生という国語の先生に非常に可愛がられた。その人が東京の大学を出て七中の先生をやっていました。その橋詰先生、橋詰孝一郎は実は長

塚節の親友なんですよ。非常に仲がよかったようです。だから、七
中に勤めている先輩教師に安塚千春がいて、それが橋詰先生の教え
子で、その先生というのは長塚節の親友だということになれば、
「アララギ」の新人の保義先生が安塚さんに近づくのは当たり前でし
ょうね。それから今井栄さんという人は、墨田区の白髭神社の神主
さんだったそうです。もう一人、ここに重要な人物がいるんです。
それは安塚千春の恩師である橋詰先生のその三男坊、これが時々こ
ろがり込んで来るんだそうですよ。慶応の医学部を中退したんです
けどね、小説家になっちゃった。竜胆寺雄という筆名よゑだじゆうの小説家なん
です。これはあなた方は知らないでしょうけれど、まだ健在なん
です。書いています、まだ。昭和の初めに川端とか横光とかを中心に
して、新感覺派というのがあるのは文学史で習ったでしょう。あの
頃に新興感覺派というのがあった。その中心人物がこの竜胆寺雄な
んです。そして彼は川端さんとお神酒徳利みきどろで一年中一緒にくっつい
て歩いて、お互いに影響しあった。たとえば川端さんに「浅草紅
団」なんてのがあつた。あの材料は自分が提供したんだと竜胆寺は言
っています。

この竜胆寺が七中の教師仲間、五味先生も一緒の文学仲間で、い
ろいろごちゃごちゃ話し合っていたらしいんですよ。このことは、
私はかなり重要な意味を持っているだろうと思っています。

で、五味先生は一年間七中に勤めまして、そのあと京都大学の国
文科に入学なさいます。指導教官は沢瀉久孝さわひさたか。晩年に中央公論社か
ら「万葉集注釈」という万葉集全部を扱った立派な著述があります
けれど、万葉学者としては日本では一、二といえますかね、トッ
プクラスだったでしょう恐らく。その沢瀉さんが助教だったころ

に入学して指導を受けるようになります。そうして、その門下生の
優れた学者の卵と深いおつきあいをするようになる。そのまま行け
ば、先生は学者コースをとっただろうと思っんです。これも一つ重
要なこととして頭に置いて下さい。ただ当時すでに新進歌人とし
て、学生歌人として、先生はかなり有名な歌人だったらしい。これもど
まで本當か知らんけど、近代文学のある有名な研究家の書いたもの
を見ますと、伊東静雄という学生が当時京都大学にいた。これが歌
よみになりたかったけれども、同じ大学の中に五味保義というのが
いるから、これじゃいくら俺がやってもだめだというんで詩人に転
向したつていうんです。伊東静雄つてご存じでしょう、有名な詩人
ですよ。ですから先生は若い頃からキラキラしたところがあつたん
でしょうね。

先生の大学の卒業論文は、万葉集卷十三に関するものです。ご存
知のように卷十三の歌は一見古いけど、歌の匂いそのものは新しい
でしょう。みなもとは古いけど、今見る歌の形になったのは新しい
んじゃないかという説の立て方で、非常な問題を含むわけなんです
けど、それが卒業論文になりました。沢瀉先生が審査したんですし
う。卒業して文学士ですね。その論文はいち早く京都大学の「国語
・国文」という専門雑誌に掲載されます。学者としての登竜門、そ
こへまず足を踏みかけたということになります。そして就職は京都
の舞鶴の海軍機関学校の教官になります。今、海軍なんていっても
あなた方にはピンとこないでしょうけれど、それは当時は大したもの
のなんですよ。ところが驚いたことに一年足らずでそこをやめちゃ
うんですよ。なぜやめたかというのと、どうしても東京へ出たい。東
京には斎藤茂吉とか土屋文明とかの現物がおる。歌の指導を受ける

にしても、雑誌の上でとってくれた、とられなかったという指導と、そばへ行つて実際に顔を見て声を聞いての指導と、それはずいぶん違つと、先生は後に「体温」という随筆で書いています。言つてみれば五味先生は、実際に身近にそばに行つて、体の温かさを感ずるようなところで指導を受けたい、と思ひ込んだわけですよ。ですから退職を申し出た。校長の海軍中将は退職の理由がどうしてもわからないといったそうです。それはそれでしよう。当時大不況の時なのに、新卒にしては就職先として大したところだったのであるから。一年足らずでやめちゃう理由が歌をつくりたいからという、これは理解できませんよ、軍人には。

ただここで注意することは、その短期間の間に先生は身の回りの軍人達に歌を指導しちやうっているんですよ。つまり先生にはどこにおいででも人を指導する、育て上げることが天性のものとしてあつたらしい。赤彦直伝なのか、先生の体質なのか。いたるところで後継者を作つたことをやつたんですね。舞鶴の在任中に指導した軍人の中には、戦争中に非常にいい歌を作つて後世に残るような歌をつくつた人もある。たとえば講談社から出た「昭和万葉集」という大部の本がありますね。あれの中に立派な歌を残している佐藤完一なんていう軍人をそこで育て上げちやうつたわけですね。短期間ですけれども、よほどいい指導をしたのかも知れませんが、受ける方も一生懸命聞いたんでしよう。ただ先生自身の歌はその頃低迷状態というところにあつたようです。

まだ機関学校在任中のことですが、「アララギ」には安居会あんごうかいというのがございまして、安らかに居ると書く、これは仏教の方にあります。夏安居のことです。夏の間のお坊さんの特別な修業なんです

けれども、赤彦がその言葉をとつてやつた勉強会です。会員がみんな集まつて、雑誌の上だけじゃなくて、直かに集まつて、お互いに研鑽し合うというのを始めまして、これを赤彦が安居会と名付けました、現在もそれは続いて毎年やつておりますけれども。それが九州の阿蘇山でやつた時に、五味先生は徹底的に土屋先生からやられたらしいんですね。それですっかり参つちやつたらしい。ここが先生にとつて最初のピンチだったんじゃないかという気がします。そこで歌にあきらめをつければ、先生は学者コースへ行つて、偉い万葉の博士になつていたんでしよう、多分。そうでなくて、そこで歌を粘ねつたんですね。そうして昭和三年の末頃には、やつと危機を脱しまして、「新舞鶴」という題で歌が「アララギ」にたくさん取られました。これは後に先生の処女歌集「清峽」の最初を飾つているものですけれども、その歌が昭和四年の一、二月号の「アララギ」に載つて土屋先生に称揚されたんです。すばらしい歌です、皆、何首か読んでみましょう。

雨戸あけず幾日いくひにならん勤より疲れかへりて服ぬぐ寒さ

海に向く窓より海は見えなくに薨がの上にひくき岬山

我が窓に続く薨がの向うには入海くらくあるをぞ思ふ

どれも皆輪郭が非常にはつきりしています。非常にはつきりした輪郭があるけれども、乾燥してはいない。しつとりとした、でれではない、しつとりとした味を持ったいい歌で、これは先生が本格のコースに乗つた最初でしょう。言つてみれば専門家の道の見えて来た最初の歌なんです。いくら読んでみてもあきない、すばらしい歌です。この辺から真似すると、初心者もひとかどの歌ができるんじゃないかな。「海に向く窓より海は見えなくに薨がの上にひくき岬

山」なんてのは、目で見た景色の中に作者の心が見事ににじみこんでいるでしょう。「窓より海は見えなくに」なんてあたりには、非常に機敏に神経が働いている歌なんです。これで危機を脱して、そうして東京の生活をするようになるんですけれど、できるだけ多くの時間「アララギ」の発行所にいたいということから、お勤めは、もっぱら非常勤専門です、あっちこっちの。専任はやられず、あっちこちかけ持ちの非常勤ばかりやっていましたようです。

そして昭和五年頃から万葉集関係の仕事が、先生にいくつか出てまいります。その一つは、昭和七年に土屋文明先生の「万葉集年表」という本が出るんですけども、そのお手伝い。四千五百数十首の万葉集の歌、これはご存じのように、あの編纂形式というのがよくわからないんですね。何か体系があったけれど崩れちゃったような感じで。その万葉集の四千五百数十首の歌を年代順に並べたならば、歌の読みぶり、歌風の変遷がわかるんじゃないかという土屋先生のねらいでそれが初められたんですね。その助手をやったわけです。土屋先生は東大の哲学科の心理学を出た方ですよ。国文専門じゃないんですね。ただご先生は大学の教授になられて講義しているのは万葉集ばかりだったでしょう。言ってみれば素人であって専門家以上の専門家ということになります。この「万葉集年表」というのができてから、ずいぶん万葉集関係の研究が便利になったんですよ。専門の学者がみんな恩恵をこうむっているのです。それはもう実いたいへんなものです。

話をもとに戻しますと、その「年表」の助手をして、五味先生は今までよりも万葉集に深入りする。言ってみれば学者でも歌よみでもある。そういう形で万葉集に深入りして行ったわけですね。同じ

頃に万葉三水会というのが、五味先生なんか若い万葉学者で構成されます。毎月の第三水曜日に学士会館あたりで会合をやるという会。中島光風、藤森朋夫、佐伯梅友、森本治吉、遠藤嘉基、石井庄司なんていう、後々万葉学者としてのトップスターです、みんな。

ここで一緒に万葉集の研究をやった。ごく少数ですけどもみんなテーマを持って寄って研究発表をやったらしいです。五、六人なんです。研究発表をやって討論をやったらしい。その時には京都にいる遠藤嘉基などはわざわざ京都から出て来る。新幹線なんかいないですよ、その頃は。そういう熱心な会です。このことは「解釈」という国文の専門雑誌がありますね、一冊五百円の。あれの今年、五十八年の三、四、五月号の三回にかけて石井庄司先生がその思い出を書いていきますけれども、非常な勉強をしているのです。ですからここで五味先生は歌よみとしての道を強く歩くとともに、万葉学者としての道も強く歩いて、この両方歩いてたわけですね。ただこの時期にやっぱり迷ったらしいのですよ。学者になりきっちゃまおうか、歌よみになろうかというんで。迷ったということは、学者にも歌よみにも、どちらでも自分はやっていきけるという将来に対する見通し、そういうものもあつたんだろうと思うんですが。と言いますのは、その頃からいろんな雑誌や講座物に万葉関係のものを、どんどん、先生は頼まれて書いているんです。たくさん万葉研究論文を書いているわけですね。つまりそういう時期のその昭和九年に、私は先生に初めてお目にかかって、そのほとんどのお話を居眠りして過ごしたということになるわけです。

昭和十三年に東京府立大泉師範学校が創設されます。今の学芸大学です。今の学芸大学というのは戦前の豊島師範と青山師範、おく

れて大泉師範ができて、それが一緒になったんです。その大泉師範学校を創設しましたその初代の校長さんが、いまなら学長ですね、木下一雄という江戸時代以来の教育の名家の方です。この方が中心になって、それを助ける意味で五味先生は学生主事、それと寄宿舎の舎監をやって、教育職務に没頭するわけです。これが考えようでは先生における歌人としての第二のピンチだと思います。そのころ大泉で指導を受けた何人かを私は知っていますけど、とにかくすごい勢だったそうです。それがちょうど時期から言えば、昭和十年代でしょう。日本が戦争に突入した時期ですから、いまの教育とは違っています。敵しいですから、大変。それは実に熱心にやったそうです。

昭和十六年に、処女歌集の「清峽」が出版されます。私は当時九州の中学校に勤めておりまして、本屋から取りよせて読んだのですよ。最初の「海に向く窓より海は見えなくに」なんていう歌を読んで非常に感動したのを覚えています。感動して先生にハガキを書いた。すぐ返事が来まして、「清峽」を「青峽」と書く、相変らずそっかしい男だ、なんていうハガキが来ましたけどね。

昭和十七年に中等学校教科書株式会社社の重役になります。国策会社です、これは。それは、教科書が統制されたんです、戦争中ですから。その会社ができた時の編集局長、つまり身分からいうと重役ですよ。常務取締役です。業務編集局長になったんです。

学校の先生になるべく育って先生やっていたのに、一種の実業界に入るんですね。世界が全然違う。その頃のことを先生は後におっしゃったことがあります。お役人なんていうのは君、一杯飲ませないと書類にハンコ押ししてくれないんだからね、ひどいもんだよ、と

おっしゃったことがございます。社会のお金の動き、あるいは法律・制度のしめつけ、ドロドロしたような場面に先生は首をつっ込む。全然、先生の性格からいって合わないところへ入って行ったのです。ですから歌どころじゃないでしょう。この教科書会社時代の作品をまとめたのが第二歌集の「島山」で、これは先生の歌集の中では作品というところ、一番低迷していると思いますけれども、私は非常に注目したいのです。といいますのは、先生は「島山」なんかには感心するのかねとって笑っておられましたが、歌を作るのに最も不適当な時期に、歌を作っていたというすごさなのです。普通の人ならやめるんですよ、そして縁が切れるんでしょう。やめていないところが、やっぱり僕はすごいと思う。だからその次の歌集「此岸集」でいっぺんに花が咲くということになると思うのです。つまり我々人間というのは、調子のいい時は何でもできるといふことなんです。調子の悪い時どうやって持ちこたえるかということに問題がある。どん底になった時、どう踏みこたえるかということですね。私はそれを先生において、まざまざと見せられたわけなんです。作品そのものは或いは大したことはないかも知れない、先生のものとしてはね。ですが、そこを踏みこたえて続けたというすごさ。これは注目したいところだと思います。

一方その時期の先生は「万葉集作家の系列」という、万葉作家論をお書きになって出版されます。これは土屋先生の「万葉集年表」を手伝った副産物であります。つまり万葉の歌を年代順に並べてみるというところ、歌のよみぶりの変遷がわかった。人麻呂というのがいかにすごい歌人かということ、人麻呂と並ぶように評論されている赤人は、やっぱり人麻呂の追隨者だったという結果がはっきり出て

くる。家持においてはもつと明瞭ですね、そのことは。その人麻呂のすごさというものはつきりわかるような一つの万葉の山脈が見えたというのが先生の学者的な、しかも単に学者というよりも、歌よみとしての力を十分に備えた、そういう学者としての論文だろうと思うのです。

昭和二十年に敗戦になります。会社も焼けます。たくさんの蔵書もろとも田端のご自宅も焼けてしまいます。戦争の終わった二十年の八月には、実は「アララギ」という雑誌は出ていなかったんですね。十九年の十二月号までで後は造れなかったんです。印刷所が全部焼かれちゃって、アメリカ軍に。「アララギ」は後ずつと休刊でいて、復刊は二十年の九月なんです。数ページのうすっぺらなものです。表紙がそのまま本文になっているような。その一冊の本を造るために、群馬の山奥へ疎開していた土屋先生が東京へ出てくる。当時は簡単に汽車に乗れないんですよ、切符買うのが大変なんです。防空壕の入口で数名が集まって編集をするということになったのです。それでその時に、東京にいるからっていうんで、土屋先生から、五味君ひとつ仕事やってくれ、なに簡単だよ、郵便の発着所になるだけだよ、とこういわれたということです。だから簡単だと思っただけだよ、とこういわれたことになったと、先生書いていますけれども。しかしある程度の覚悟はしていたと思うんですね。昭和二十年ですよ。八月の半ばに、負けた形で戦争が終わっているんですよ。あなた方には想像できない昭和二十年代という時代があります。食う物がありませんから全く。戦争が負けて日本全部がペシヤンコになって、食う物をどうやって探したらいいだろうかという時に、自分の女房子供は信州に疎開させたままにしておいて、そっ

ちは面見してやらないで、うすっぺらな一冊の雑誌を造るのに血まなこになっているというのはい体何だろう。印刷所を探す、紙を探す、これは何なのだろう。正気の沙汰じゃないだろうと思うんですね。だが、そこに先生の新しい一つのコースがいやおうなしに目の前につきつけられていたと、こういうふう思うのです。

二十年の秋、私は戦争で散り散りの会員あての新聞広告を見て、世田谷の「アララギ」発行所へ尋ねて行ったら、それは五味先生のご自宅だったわけです。それから日曜、祭日、休みがあればおそばへ行っって手伝いをしたんですけれども、食う物が無い時期に、机の前で背筋を伸ばして編集事務をとっている先生を見ますと、やっばりこっちも頭がおかしくなりますね、結局。それから私は先生にべったりになって。だから五味先生は何でしょうね、赤彦や文明先生にめぐり合わなければコースが狂わないで大した学者になってたろう。私もあの背筋を伸ばした先生を目の前に見たということ、コースが変わっちゃったのかなと思う。ああ俺もひとかどの学者にはなれたかも知れないのにと頼らないことを考えることがあるんですけれどもね。

以来、先生は「アララギ」の編集長として非常に苦勞をするわけです、昭和二十年、三十年代をですね。約二十一年間、編集長として苦勞します。終戦後の二十年代、三十年代をです。ですから五味先生ご一家は、言ってみれば、先生が物好きに歌なんか作ってそして編集なんか引き受けるから、えらい目にあつたわけですよ。五味夫人は後にずっと長く病気をされたけれども、その病氣の一つの原因がああ時期の過勞にあるのじゃないかと私は思ったことがあるんですがね。実際にそんな状況がずっと続きまして、昭和四十年に先

生は発病するわけです。糖尿病、高血圧。そして入院したのが旗の台の昭和医科大学附属病院、その。当時昭和医科大学といっていたかしら。しばらく入院されてよくなってからお家へ帰られたが、病気が病気ですから、これは長びきます。そうして退院した後、自宅で静養中に脳血栓をやるのです。今度は虎の門病院に入院するということになりました、本式の病気になっちゃったんですね。虎の門病院入院の時は、お見舞に行った時、私はもうとてもだめかと思ったような具合だったのですけれども、それを先生は非常に激しい意志力ではね返して、一応直った。けれどもどうも中気のヨイヨイですよ。左半身不随ということですが、寝たつきりになると、動けなくなるから無理しても運動しなくちゃいけないんですね。リハビリテーションですか。非常に激しい意志で苦しい散歩を続ける。約十七年間のそういう闘病生活を経て、ついに回復せずということになるわけです。昭和五十七年の五月二十三日に亡くなられます。翌年の三月九日には弟さんの智英先生が亡くなる、とこういうことなんでしょうけれどもね。

亡くなった後、先生のメモがたくさん残っています、それが誰にも読めないような字で書いてある。どうやら歌を書いたらしい。三千首くらいあるらしいというのです。三千首はたいへんな歌数です。そんな状態になっても歌、歌、歌ということだったんですね。長男の保男さんという方は東大の薬学を出まして、今金沢大学の教授ですけれども、それがあある時、お父さんに聞いたそうです。お父さん何が一番惜しいかと聞いたら、手が不自由で思うように歌の書けないことが残念だといったそうです、回らない口で。保男さんはその執念の強さに背筋が寒くなったというようにおっしゃ

っていましたけれども、どこまでも歌、歌、歌、歌なんです。鬼ですよ、全く。私は先生のそういう生涯を振り返って見た場合に、その生涯そのものと歌のよみぶりの変化というのを見ますと、いろんなことを考えさせられます。もともと先生の歌風は輪郭の非常にはつきりしたもので、よく行けば非常にこれは明確でよいのですけれども、うまく行かなかつた場合になると、茂吉がコクメイなんだなつまり、と評したというようなことになるでしょうね、そういうものは。ゆらぐようなロマンというのはずっと無かつたと思ふんです。ご病気になりましたからは形が少し崩れまして、意味の通らない部分とか文法にはずれた部分とかが出てくるけれども、前には無かつた不思議なロマンのゆらぎが出てきているんですね。これは妙なものだと思えますけれども、歌風が晩年になってばつと変わっちゃっているんですよ。その歌風の変遷をかけ足で、見てみましょう。初期の

ひた悩む弟の背をさすりつつ着物の紺の手に染みにけり
この辺はまだ素朴なところがありますね、非常に忠実な写生で。
雨戸あけず幾日にならん勤より疲れ帰りに覺の上にひくき岬山
海に向く窓より海は見えなくに覺の上にひくき岬山

昭和初期のこういうのを見ると、はつきりしたリアリズムの自然描写というのがわかるでしょう。それから、次の歌などには明らかに文明先生の影響があるでしょうね。「島山」にあります。

金の話になりたる時しわが妻がやや口早になりたり
下の句字足らずですね。こういうむずかしい生活の歌もある。これはもう文明先生の開いた道を歩いているのですね。お父さんが借金を残して亡くなったらしいのですよ。それを返すのにずっと苦労

したらしい。

で、二十年の戦後は、先生は一つのピークに登る。「此岸集」の歌です。

さへぎりもなき東京を吹く嵐夜なれば暗く潮の香を吹く

すっかり焼け減びてしまった東京。世田谷のお宅のあたりにも東京湾の潮風がただよつて来たらしい。途中のビルがみんな無くなっちゃってますからね。

国に人に念ひしきりなる夕まぐれくらきたたみに足袋を穿き居り戦後、どうやって立ち直るかということ、自分だけのことで考えではおられなかったんでしょね。日本全部が、日本人全部が立ち直ること、それを先生は、自分としては歌によって立ち直るべきだと考えた。そういう歌らしいです。

散る雪は谷のまほらにひねもすに見えつつ清き光さすなり

土屋先生の疎開地、群馬県の実地で歌ったのでしょ。非常に美しい歌ですね。輪郭がはっきりしていながら、きめ細かく柔かいこの美しさというものは何なのでしょね。

吾をわが仕事をにくむと言ふ妻にこよひは吾は物言はずをり「アララギ」なんかを引き受けたから、こんなことですよ、うち、なんて言われたんでしょかね、奥さんに。

次の歌は「此岸集」の次の歌集「小さき岬」のものです。

夜をとほす採血のあひだに見たりける短くさびしき夢は忘れぬ昭和医大附属病院入院中の歌です。

黒々と眼に迫る山の夏霞からだ衰へてかへり来にけり

これは病後郷里の諏訪へちよつとお帰りになった時のものでしょ。それから、次の歌集「病間」のもの。

も言はぬ男となりてわが居れば世の常人はもの多くいふ

これは淋しい歌です。先生は非常に弁説がさわやかな方でした。そして地方へ歌のことで旅行をすると、地方の民謡を一回聞いてそのまま覚えて来て歌うという人だったんです。非常に耳がいい。落語もうまかったしね。それが、口が不自由になってみると、世の中のやつらはおしゃべりが多いなという、非常に淋しい歌です。次は未刊の「病間以後」のもの。

む

死ということを目の前に置いて考えている歌です。ぎりぎりの段階にきている歌です。こういうふうに歌がだんだんゆらぐような調べのものに変わって来ているわけです。

先生の生涯というものを振り返ってみますと、学者コースと教育者コースと歌人としてのコースと三つのコースがあったと思うんですね。そのどれでも先生は第一級になったと思うのです。そうしますと、先生においては、先生のいろんな条件を総合して考えますと、歌よみの道を行ったということは、最適の道を行ったのかどうかわからないということになると思んですよ。性格や何や、そういうものを総合的に考えますとね。学者コースが一番先生としては効率的なコースだったんじゃないかと思うのに、歌へ行ったということはこれは運命じゃないかと思うのです。先生はそれに気づいておられたようです。先ほどここで講話なさった学長先生と、この会の前しばらくお部屋で話したんですけれど、智英先生と昔中学で一緒だった時のことで、あれは口が悪いけど生真面目だったな、モラリストだったなと。その兄貴の禮夫さんというのもこれはとにかく

真面目で、上の兄貴が真面目だからだと、そう学長先生おっしゃってましたね。そのことは五味先生が文学者としては恵まれていたのかどうか、ちょっと私にわからない。思いきって言えば、恐らく歌人としてよりは、万葉学者としての方が大成したのじゃないかと思うんですけど、歌が好きで歌に行っただんじやしょうがない。こういうことが世の中にはあるんじゃないか。私も口はばつたいことを言えば、つまり松隈先生が自叙伝をしゃべれと言うんで最初に自叙伝しゃべったから、ここで自叙伝で締めくくりますと、私もことによるとと学者になっちゃって、漢文専門家になっておれば、いま頃は偉い博士にでもなっていたのかも知れないなと思うのですよ。しかしそれが、五味先生に出会って、それから土屋先生に出会ったのが運のつきですね。初めて土屋先生にお会いした時、君は学者にはなれるようだけど歌よみはだめだなとそう言われた時、私が素直な若者だったならば、そうですねって学者になっただらうけれども、惜しむらくは、つむじがかかたにあるような男ですからね、私は何言ってやがんだ、そんなら俺は歌やってやる、と思つて歌よみになつちやつた。これは今考えるとしまつたと思ふけど、もう半世紀たつちやつたんでそれから間にあいませんがね。人間にはそういう運命というものがあるな、一番向いている道を行けるかどうかわからないなと思う。しかしこれが自分の選んだ道だと思つたら、得だらうが損だらうが、それを行くよりしょうがないとなれば、先生もやっぱりあれで本望だったんじゃないかなあ、というふうに考えます。

自叙伝で始まりまして自叙伝で締めくくりました。長広舌ご静聴、ありがとうございます。

(第18回・文芸学会での講演から。速記・村松真理子Ⅱ第15期卒)

第八回・文芸科賞の選考経過

第八回・文芸科賞の応募作品は、昭和五十九年一月十七日に締め切られ、文芸科専任教員と原、木野、利根川三先生によって選考が行われた。応募作で選考の対象としてとりあげられたのは、細川里恵(二年M)の小説「日向、風の日」、塩田直子(二年L)の詩「白い壁のむこうで」など七編、澤井奈緒美(一年L)の「Justin Ray nato」。

原、木野、利根川三先生のご採点は、いずれも五点から七点どまりで、受賞作はなく奨励の意味合いの賞も不要という見解と、そうした弱点を認めながらも三人の努力に対して全員奨励賞をあげてもよいとする判定とに分かれる結果となった。

そのことをふまえた上で、専任教員が討議を重ね、文芸科賞は該当作なしと決定。総じて若さの持つ特権と未熟さを指摘された三先生が、かなり高度の評価基準に立たれているという判断から、観点を変えて完成へ向けての可能性を認めようとする方向で論じ合い、結局奨励賞を塩田直子の詩作品におくことに決定した。

着想の目新しさやレトリックの面白さは見られないが、自己の内面の姿を自律的な作品に構成しようとする意志がかなり明瞭に読みとれる点、場合によってはその志向が情感を規制するおそれもあるほどだが、七編のなかでは「黄色いろうそく」がもっとも成功しているという点が評価されたものである。